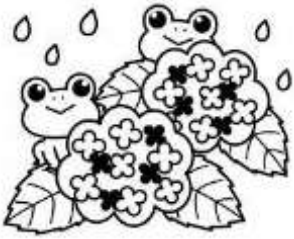


\*\*\*\*\*



# けやき

令和3年

# 6月

さいたま市立 大宮北小学校 学校だより

\*\*\*\*\*

## 小さな来客からの学び

校長 渡辺 明

地域の方からいただいたCDに「一ねんせいくん おとうとくん」という懐かしい歌がありました。「きみきみ きょうしつ おぼえたかい」という歌詞で始まる、新一年生を見守る心情を歌ったもので、毎年新入生を迎える私たちとしては、本当に心に沁みる歌です。その新一年生も、2か月の小学校生活を経て、ずいぶん遅くなりました。

5月には珍しい来客もありました。ある日の朝です。カルガモの親子が東光寺から氷川神社方面へ引越しをする道すがら校内に迷い込んできたのです。親ガモを先頭に、毛糸玉のような子ガモが一生懸命についていきます。その様子を、見守りの方や登校してきた子どもたちがハラハラしながら見えています。正門から入ってきて、ピロティーを抜け、校舎沿いに進んで来ましたが、なんと東昇降口から校舎内に入ってしまった。そのまま男子トイレ、女子トイレを回ります。ようやく昇降口から出て、北門へと進み始めたときには、一同ホッと、小さな拍手が起きました。



カルガモ親子（図工室前廊下にて）

感心したのは、親ガモの様子です。子ガモが段差を乗り越えるのをじっと見守ります。遅れた子ガモがいたら、立ち止まって視線を送りながら待っています。親と子の間の目に見えない愛情を感じます。

一生懸命な子ガモの姿が、一年生とも重なります。GWの頃には、多少登校しぶりの様子も見られました。親ガモの姿が見えなくなった子ガモの気持ちなのかもしれません。それでも教室に入ると、元気に活動していました。そこには担任も、学級の仲間もいます。子どもたちは自分を取り巻く世界の中で、互いに支えたり支えられたりしながら大切なことを学んでいます。

一方で、そんな優しさや思いやりの気持ちの対極にあるのが、いじめの問題です。子どもたちに「いじめはいいことか悪いことか」と尋ねると、例外なく「悪いこと」と答えます。しかし、私たちは「いじめは起こらう」という危機感を常にもっています。そういう視点や覚悟がないと、いじめを見過ごしてしまうことになりかねません。

「悪いこと」とわかっているいじめがどうして起こるのでしょうか。子どもたちは「優しい気持ち」をもっています。そして、その同じ子どもたちの心の内に、ときとして「意地悪な気持ち」や「無自覚な行動」が起こることがあります。人物の一方の肩に天使、一方の肩に悪魔がいて、両耳から交互に囁きかけるような比喩表現がありますが、これは人の心のありようとしては一般的なものだと思います。心の中には善悪の気持ちがあり、その葛藤の場面で正しい行動がとれるかどうか分かれ目です。道徳の授業でも、この葛藤場面を大切にしています。「今、自分の心にわいてきたのは、意地悪な気持ちだ」ということに自分自身で気が付いて、その気持ちに負けないことが大切なのです。そして、その気付きや正義の心を育てることが、大人の役割です。

子どもたちの日常を見ていると、「静かにしろよ」「掃除ちゃんとやれよ」「授業に遅れるよ、早くしろよ」というような言葉のやり取りがあります。言っていることは正論であっても、その言い方で相手を威圧したり、傷つけたりします。これも人間関係のトラブルや、いじめの芽になる可能性があります。大げさな表現かもしれませんが、言葉に「愛」があるかどうか伝わるのです。もちろん、大人から子どもへの関わりも同様です。

6月は「いじめ撲滅強化月間」です。私たちもカルガモの親子の姿から学び、子どもたちへの「愛」のある指導を継続していきたいと思います。